

高山の文化を高めた人々

46

都竹豊治さんを偲ぶ

(故)桜井 幸子

代であったとも言えます。そんな私たちを奥さんのきさ子さんは温かく迎え、陰ながらを支えてくださいました。

*

都竹さんは、陸軍中野学校を卒業した職業軍人でしたが、昭和二十七年、戦後の公職追放をきっかけに「撫石園」を創業されました。

都竹さんは昭和三十六年夏、自宅の庭に大塙間先生の碑を建立されました。また、「飛騨短歌」をこよなく愛する私たちは、昭和四十七年春、都竹さんのご尽力により、先生の出身地である丹生川の正宗寺に石碑を建立しました。

*

「縄^{なわ}縄^{なわ}の機械とめれば夕光^{ゆうこう}の中に埃のしずみゆく見ゆ」

私と都竹さんとの出会いは、大塙間齋江先生主宰の「飛騨短歌」に入会してからです。都竹さんは、昭和二十二年に入会され、若山牧水と親交の深かった福田夕咲先生をはじめ、大塙間先生から短歌の指導を受けられました。



「石の声」出版記念会にて(妻のきさ子さんと)

これは、昭和二十八年の明治神宮献詠歌の全国十傑に選ばれた短歌です。このことが都竹さんにとって大きな

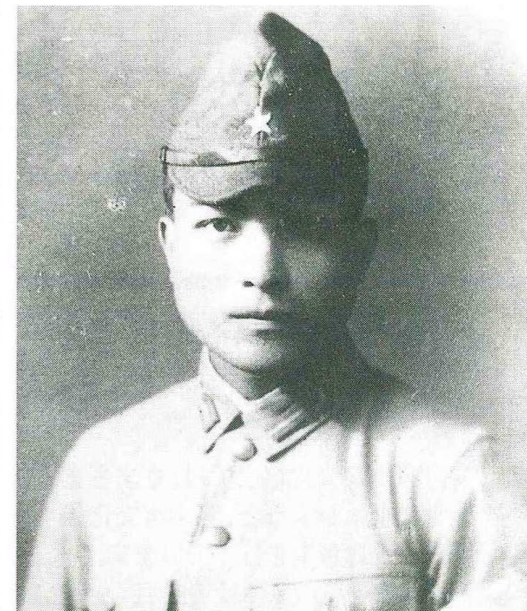
自信になり、昭和四十九年には、正岡子規や斎藤茂吉の流れをくむアララギの同人、その後、新アララギの同人となつて活躍されました。

また、教師になるのが夢だった都竹さんは、高山や古川などにある十一グループの短歌会の指導を亡くなる一カ月前まで務められていました。厳しい一面もありましたが、的確な指導のおかげで、教え子たちは現在、新アララギなどに入会し活躍しています。

「明日からは市となる村の名をとどむ橋を渡りて搾乳にゆく」。これは、昭和五十年に出版された第一歌集「村から町へ」のタイトルとなった歌です。

*

「歌は、読んでくれる人に自分の訴えたいことを理解してもらつてこそ妙味がある。表現は平板でも自分の気持ちが



陸軍の憲兵だったころ

入っていればいい」という都竹さんは以後、「石の声」など三冊の歌集を出版され、多くの名歌を残されました。最後の歌集「続々石の声」は、仕事を通した歌が多く収められています。「碑を刻む杜の空気が動き出しぬ激しき雷雨のいよよ迫りて」。

都竹さんと私は仲の良い間柄でしたが、短歌の上では互いの主張があり、良きライバルでもありました。病床にあつても原稿用紙とペンを離さなかつたという歌友の面影に、次の短歌を捧げ心から冥福を祈りたいと思います。

「次の世も良きライバルでいて下さい黄泉への旅の唯に安かれ 幸子」

※桜井幸子さんは、この原稿をお寄せいただいた後、五月二十日に逝去されました。ご冥福をお祈りします。